

~~~~~  
論 説  
~~~~~

理論からストーリーへ

——構成主義的グラウンデッド・セオリー法とは——

抱 井 尚 子*

1. はじめに

グラウンデッド・セオリー法 (Grounded Theory Approach: 以下 GTA) は、社会科学の研究アプローチとして半世紀近い歴史をもつ。質的研究においては、エスノグラフィを凌いで恐らくもっとも頻繁に用いられているのが GTA であるとされている (Morse, 2009)。GTA の誕生と発展の歴史は、戦後から現在に至るまでの社会科学の発展の経緯そのものであるともいえる。そして、21 世紀となった現在、カリフォルニア大学サンフランシスコ校 (University of California, San Francisco: UCSF) においてバーニー・グレイザー (Glaser, B. G.) とアンセルム・ストラウス (Strauss, A. L.) に師事したかつての教え子たち (第 2 世代グラウンデッド・セオリスト) が、50 年近く前に恩師が考案した研究方法を現代思想の潮流に合わせて独自に発展させ、新たなバージョンの GTA を提唱している。その結果、現在 GTA には哲学的前提を異にする複数のバージョンが存在するに至っている。さまざまなバージョンの GTA の誕生によってこれまで以上に社会科学における GTA の存在感が増してきている一方で、それぞれのバージョンの違いが明確でないことを原因とする混乱が生じていることも事実である。自分は一体どのバージョンの GTA を用いるべきなのか迷ってしまう人は、特に研究法初学者の間には多いだろう。

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

そこで本稿では、GTA の発展の系譜を概観するとともに、21 世紀以降さまざまな分野においてその関心が高まりつつあるチャーザー・シャーマズ (Charmaz, K.) の構成主義的 GTA を取り上げ、その特徴を概説したい。

特定の時代において「正当」と認められる社会科学の研究アプローチは、その時代がもつ制約や思想的潮流から独立しては存在することはできない。研究において用いられるアプローチは、研究者のもつ哲学的視座によって既定されるものだが、そのような研究者の視座もまた、専門領域、科学史・科学哲学、利用可能な科学技術や、研究助成金の配分のあり方のような制度的要因をはじめとする種々の制約および思想的潮流に強く影響を受けて形成される。さらに、特定の研究アプローチを用いることによって得た洞察が今度は研究者自身の世界観を変容させ、延いては研究者コミュニティにおいて共有される言説や思想的潮流のあり方をも変容させる可能性がある (図 1)。したがって、60 年代後半の GTA の誕生およびそれ以降において複数のヴァージョンの GTA が誕生するに至った経緯を理解するためには、当時の社会科学研究を取り巻く歴史的背景の知識が不可欠となる。

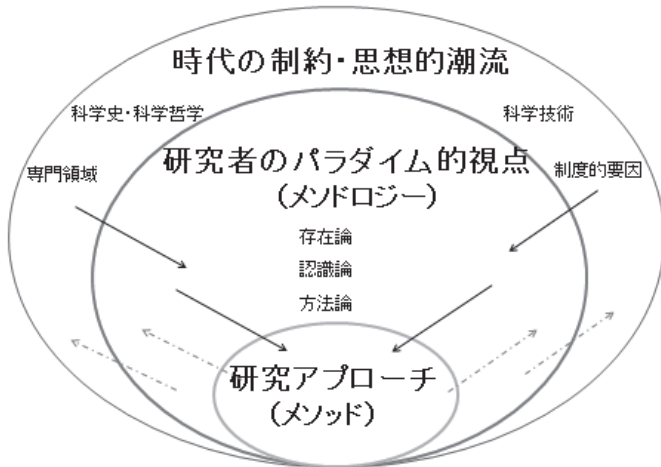


図 1. 研究アプローチに影響を与える諸要因

以上を踏まえ、本稿における議論を次のような構成で進める。まず GTA の誕生とその発展の歴史的背景について概観する。次に、本稿の中心テーマである構成主義的 GTA の特徴について解説する。シャーマズ自身 (Charmaz, 2000 / 平山監訳 2006) も主張するように、構成主義的 GTA を理解する上でもっとも効率的な方法は、GTA の古典版である客観主義的 GTA との比較を通してである。したがって、本稿においても、まず 2 つのバージョンに共通する GTA の特徴を整理した後に、客観主義的 GTA との対比を通して構成主義的 GTA の特徴を明らかにしていく。具体的には、古典的 (客観主義的) および社会構成主義的 GTA の間にある違いを、(1) 哲学的前提、(2) 分析の焦点、(3) 研究目的、(4) 問いの立て方、(5) コード化の戦略、(6) 最終プロダクトとしての「理論」とその執筆スタイルの観点から概説する。その上で改めて、構成主義的 GTA とは何か、どのように研究に用いることができるのかについて、筆者の考えをまとめる。最後に本稿のむすびとして、構成主義的 GTA の今後の展望について述べる。

2. GTA の誕生および発展の歴史的背景

以下では、主にシャーマズ (Charmaz, 2000 / 平山監訳 2006, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, 2014) に依拠し、GTA の誕生および発展の歴史的背景について解説する。

GTA は、データに根ざした中範囲理論¹⁾の構築を目指す、帰納的なデータ収集・分析に関する系統的なガイドラインである。GTA を用いて構築された理論は「グラウンデッド・セオリー (grounded theory)」と呼ばれる。GTA の起源は、社会学者バーニー・グレイザーとアンセルム・ストラウスによる古典 *The discovery of grounded theory* (Glaser & Strauss, 1967 / 後藤・水野・大出訳 1996; 以下 *Discovery*) にあるが、これはグレイザーとストラウスによる『死のアウェアネス研究』(Glaser & Strauss, 1965 / 木下訳 1988) において用いられた研究アプローチを著述としてまとめたものである。

1) 領域が特定された、個別事例を説明する特殊理論のこと。

GTA 誕生の背景には、20 世紀半ばの社会科学における実証主義の優勢への反発があった。仮説演繹法と反証主義が科学的研究の中心であったこの時代は、多くの研究が量的研究アプローチを用いた既存の理論の検証に終始する傾向があり、新たな仮説や理論の発見や生成が為されにくい風潮を作り上げていた。そのような中、質的研究者たちは、帰納法による研究アプローチを自身の研究の基本的方向性として位置づけるようになって行き、これに勢いを与えたのが GTA の出現であった。また、グレイザーとストラウスによる *Discovery* は、これまで口承によって指導がなされてきた質的研究の手法を、初めて厳密なガイドラインとして体系化したものであり、この点においても、GTA は質的研究の発展に特筆すべき影響を与えたといえる。

GTA を考案したグレイザーとストラウスは UCSF 看護学部を拠点に活躍した社会学者であったが、二人が博士課程で受けた方法論のトレーニングは異なる認識論的立場に基づくものであった。グレイザーはニューヨークのコロンビア大学において、量的研究の大家であったポール・ラザルスフェルド (Lazarsfeld, P. F.) と中範囲理論の提唱で有名なロバート・K・マートン (Merton, R. K.) に師事し、一方のストラウスはシカゴ大学においてシンボリック相互作用論者として著名なハーバート・ブルーマー (Blumer, H.) のもと、フィールド調査を重視するシカゴ学派社会学を修めている。したがって、グレイザーとストラウスによって生み出された GTA は、いわば二つの異なる認識論的立場のシナジー (抱井, 2010) として結実したものであるといえる (図 2)。

GTA におけるグレイザーとストラウスの影響は、明確な形でその特徴に現れている。まず、量的研究のバックグラウンドをもつグレイザーの影響としては、質的研究の手法を厳密に体系化された「ガイドライン」という形で明示化した点、量的研究が重視する「客観性」をデータの切片化によって担保している点、理論はデータから「発見」されるものと捉えている点、中範囲理論の構築を志向している点などが挙げられる。一方ストラウスの影響としては、フィールド調査によるデータ収集を志向している点や、個々人のもつ行為主体性、プロセスの解明、社会的・主観的意味、問題解決の実践、そして行為に関する制

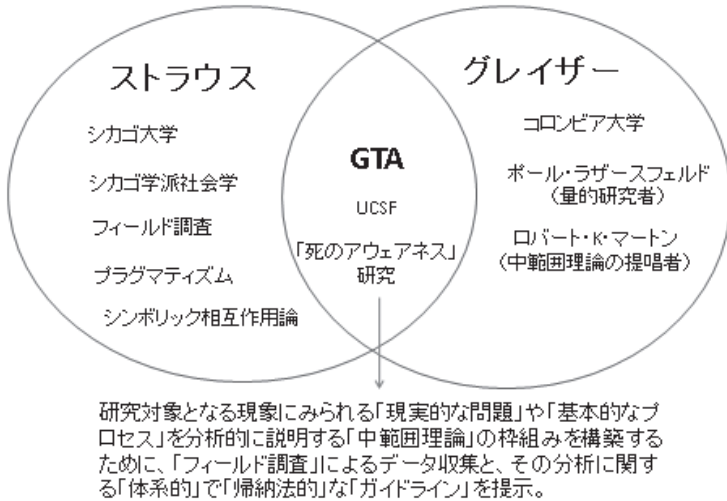


図 2. 認識論的シナジーとしての GTA

約のない研究を志向している点などが挙げられる。これらは、シカゴ学派社会学とプラグマティズム哲学から生まれたシンボリック相互作用論の流れを汲むものである。

実証主義が支配する時代において、厳密性を欠くという理由から、質的研究は本調査（量的研究）の前に実施する予備調査の地位に甘んじていた。そのような中、グレイザーとストラウスによる古典的 GTA は、量的研究のもつ「厳密性」が質的研究においても担保可能であることを初めて知らせた。グレイザーとストラウスによる GTA の誕生以降、質的研究を行う研究者たちは、自身の研究の正当性をアピールするためにこのアプローチを用いるようになって行った。

1967 年の *Discovery* の出版以降、グレイザーとストラウスは *Time for Dying* (Glaser & Strauss, 1968), *Status Passage* (Glaser & Strauss, 1971) といった共著本を出版したものの、やがて二人は互いに異なる方向に GTA を発展させることとなる。その結果、GTA は、*Theoretical Sensitivity* (Glaser, 1978) 以降の

グレイザー版 GTA (Glaserian GTA) と、*Basics of Qualitative Research—Grounded Theory Procedures and Techniques* (Strauss & Corbin, 1990, 1998 / 操・森岡訳, 2004) のストラウス版 GTA (Straussian GTA) の2つに枝分かれして行った (Morse, 2009; Stern, 1995)。ストラウス版 GTA には、*Discovery* には無かった種々の分析テクニックが新たに加えられた。『質的研究の基礎』という邦題に翻訳され、広く読まれることとなったストラウス版 GTA²⁾ は、より緻密なガイドラインを導入することで密度の濃い理論生成に向かおうとする、ストラウスとコービン (Corbin, J.) による GTA の独自の展開であるといえる。日本で GTA 関連の研究論文・著書³⁾ を多数出版し、当該研究アプローチの普及に尽力してきた UCSF 出身の看護研究者戈木クレイグヒルは、このストラウス版 GTA の流れを汲むといえよう。また、コービンの執筆による『質的研究の基礎』の第3版 (Corbin & Strauss, 2007 / 操・森岡訳 2012) は、これまでの版とは一線を画す、よりシャーマズ版 GTA に近いものになっている点を加筆しておく。

近年においては、UCSF でグレイザーとストラウスに師事したかつての教え子たちが、グラウンデッド・セオリストの第2世代として新たなヴァージョンの GTA を生み出してきている⁴⁾。その一つの例がキャシー・シャーマズによ

-
- 2) ストラウスとコービンは著書の中で、彼らの GTA が拠って立つ哲学的前提 (パラダイム) について明確な言及をしていない一方で、外在的なリアリティの存在を否定し、実証主義的なスタンスを拒否することを明言している。このことから、GTA の構成主義的ルーツはストラウスとコービンにあるという主張もある (e.g., Mills, Bonner, & Francis, 2006; Hallberg, 2006)。一方、シャーマズ (Charmaz, 2000 / 平山監訳 2006) は、これまでに出版されたストラウスとコービンの著書 (Strauss & Corbin, 1990, 1998 / 操・森岡訳 2004) において彼らの存在論的・認識論的主張に一貫性がないことから、ストラウス・コービンの GTA は客観主義的前提と構成主義的前提の間を揺れ動いていると指摘する。さらにシャーマズは、ストラウス・コービン版の GTA が厳密なガイドラインを提供していることから、彼らの GTA もグレイザー版 GTA 同様、客観主義的 GTA であると結論づけている。
 - 3) 一部の例を挙げれば、『質的研究法ゼミナール：グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ (第2版)』(2013) や、『グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いたデータ収集』(2014) のような近刊がある。
 - 4) 第2世代による新たな GTA の展開例として、レオナルド・シャッツマン (Schatzman, 1991) による次元分析 (dimensional analysis)、アデル・クラーク (Clarke, 2003, 2005) による状況分析 (situational analysis)、キャシー・シャーマズ

る構成主義的 GTA である。構成（構築）主義（Constructivism, Constructionism）は、1970 年代以降実証主義の修正版であるポスト実証主義⁵⁾に代わるものとして急速にその関心が高まった哲学的立場であるが、これはリアリティ（現実）が個人と社会の相互作用によって構築されるという前提を採る。この立場は、研究における研究者の価値中立性を否定し、デイルタイやウェバーらが主張した研究対象への共感的理解を求めるものである（Teddle & Tashakkori, 2009）。

3. 客観主義的 GTA と構成主義的 GTA

いよいよ本節では、本稿の本題でもある「構成主義的 GTA とは何か」という問題に議論の焦点を移す。前述したように、ここではシャーマズ（Charmaz, 2000 / 平山監訳 2006）にならってグレイザー・ストラウスにより考案された GTA の古典版を「客観主義的 GTA」とし、それとの対比によって構成主義的 GTA の特徴を明らかにしていく。

二つのバージョンの GTA がもつ相違点について議論する前に、まず以下では二つに共通する GTA の実践を定義する特徴を同定し、その上で客観主義的 GTA のもつどのような問題点を構成主義的 GTA が乗り越えようとしたのかを整理する。

3.1. GTA の実践を定義する特徴

一般的に GTA の実践においては、少なくとも以下の7つの特徴が存在する。

- (1) データ収集と分析を同時に行う
- (2) 分析的コードとカテゴリーをデータから構築する
- (3) 継続的比較法を使用する

(Charmaz 2000 / 平山監訳 2006, 2006 / 抱井・末田監訳 2008) による構成主義的 GTA、そしてフィリス N. スターン (Stern, 1995) によるグレイザー版 GTA がある。日本でも、木下康仁 (2003, 2007) による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) がある。

5) 本稿では、実証主義とポスト実証主義の厳密な差別化はしない。二つの違いの詳細については、田崎 (2011) を参照されたい。

- (4) 理論構築を志向する
- (5) 行為とプロセスに着目する
- (6) メモ書きを用いてカテゴリーの精緻化とカテゴリー間の関係の定義付けを行う
- (7) 理論的サンプリングを使用する

以下では、前述した GTA の実践を定義する 7 つの特徴のそれぞれについて概説する。

まず、GTA の実践を定義する特徴 (1) の「データ収集と分析の同時進行」であるが、これは (6) の「理論的サンプリングの使用」と深い関わりをもつ GTA の特徴である。質的研究においては、あらかし分析対象となるデータをすべて集めてしまった後に分析に移行するものが一般的だが、GTA はデータを集める矢先から分析に取りかかる。そして、分析の結果示唆された仮説を検証するために、さらなるデータ収集を行う。この時に用いられるのが、理論構築のためにもっとも適切な調査対象者を選択する「理論的サンプリング」である。このように、仮説生成と仮説検証による帰納法と演繹法のサイクルが繰り返されるといって特徴を GTA はもっている。

(2) の「分析的コードとカテゴリーをデータから構築」は、GTA の帰納的特徴を表している。「データに根ざした理論」(grounded theory) の構築方法として GTA が誕生した背景には、上記で触れた社会科学的研究を取り巻く時代の風潮が関わっている。データに根ざさない、極めて一般的な、大風呂敷を広げたような誇大理論 (ground theory) の検証に明け暮れていた当時の研究のあり方への批判として GTA が考案されたことを、当該アプローチのこの特徴が物語っている。

(3) の「継続的比較法の使用」もまた、(7) の理論的サンプリングと並び GTA の非常に顕著な特徴であるといえる。これは、見解、状況、行為、説明、経験といった事に関する個人間の比較、ある出来事の始まりから現在に至るまでといった、同一人物から異なる時間軸において得られたデータ、出来事と出来事との比較、データとカテゴリーとの比較、カテゴリーと他のカテゴリーとの比

較などが挙げられる。ストラウス版 GTA では、継続的比較を促すさまざまな技法（例えばフリップ・フロップのテクニック⁶⁾）が用意されている。これらの技法は調査者が多面的な視点をもってデータの分析に従事することを可能にし、分析のレベルを深化させることに貢献する。しかしながら、同時に、技法に囚われすぎるとオープンな分析ができなくなるという負の側面もある（Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, 2014）。

(4) の「理論構築を志向」は、GTA によるデータ収集・分析の帰着点が何であるかを示している。質的研究において一般的である対象の理解や記述に留まるのではなく、GTA は研究対象となる現象の理論化を最終目標として掲げる。GTA では誇大理論とは対照的な、データに根ざした、特定の社会的現象の抽象的解釈から成り立つ中範囲理論 (middle-range theories) の構築が志向される。その一方で、GTA を用いて「理論構築」を行ったと主張する研究論文の多くは、実際には理論的サンプリングも行っておらず、理論構築に至っているとはいえないものが多いとの指摘もある（Charmaz, 2012）。

(5) の「行為とプロセスに着目」は、GTA において特にストラウスの影響が色濃く反映した部分である。行為とは、人々のもつ主観的かつ社会的意味が言語を媒介して現れる場であり、プロセスとは、明確な始まりと終わりをもつ時間的連続性を意味する。シンボリック相互作用論の背景をもつストラウスは、プロセスにおける行為の解釈に着目することを強調した。そして、研究において注目すべきは構造ではなくむしろプロセスであり、構造は人間がプロセスに従事することで構築されるものであると主張している（Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, 2014）。

(6) の「メモ書きによるカテゴリーの精緻化とカテゴリー間の関係の定義」は、調査者がアイデアを発展させる上でメモ書きが重要な役割を果たすことを示す。調査者は、メモにカテゴリーの特性を詳細に示すとともに、その根拠と

6) 事件、対象、あるいは行為 / 相互行為について異なる視点を得るために、概念を「ひっくり返す」テクニック。重要な特性を顕在化させるために、極端に異なる方向から物事を見ていくこと（Strauss & Corbin, 1998 / 操・森岡訳 2004, p. 119）。

なるデータを記録することができる。メモ書きを通してカテゴリーの特性を明らかにすることは、カテゴリー間の差異を特定し、それらの間の関係を定義することを可能にする。シャーマズの構成主義的 GTA ではカテゴリー間の関連を図に表すことがそれほど強調されているわけではないが、一般的に GTA ではカテゴリー関連図の作成が重要とされている。

(7)の「理論的サンプリングの使用」については他の特徴との関連において既に触れたが、これも GTA において顕著な特徴である。理論的サンプリングは、データ分析によって構築された仮説を検証するために、さらに調査対象者を選択する目的で用いられる。これを理論的サンプリングと呼ぶのは、母集団の代表性を目指したサンプリングではなく、理論構築を目指すための合目的なサンプリングだからである。ここで行う理論的サンプリングは、調査者のアブダクション的推論を可能にする。アブダクション的推論とは、帰納的推論と演繹的推論の両方の要素を併せ持った推論であり、「データに対して考え得るすべての理論的説明を検討し、それぞれの可能な説明のために仮説を生成し、データの検証によってそれらの仮説を経験的に調べ、そして最も妥当な説明を見出すこと」(Charmaz, 2006/ 抱井・末田監訳 2008, p. 113)である。

上記に加え、シャーマズ (Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, 2014) は、グレイザーとストラウスの古典版 GTA の特徴には「独自の分析を展開した後に先行研究調査を実施する」点加わることを指摘している。これは、分析に先入観を持ち込むことを避けるためにグレイザーによって提案されたものである。しかしながら、先行研究調査を分析が終了するまで先延ばしにするという考え方に賛同する研究者は近年ほとんどいない。そもそも研究を実施する段階で、特定分野の種々の理論に調査者は既に触れているため、必要なのは先行研究調査の結果や理論的枠組に対し批判的な姿勢をもつことであるとシャーマズは主張している。ただし、グレイザーが先行研究調査の先延ばしを重視したことには、歴史的合理性があった。これは、60年代の社会科学において優勢であった、過度に抽象的で一般的な、データに根ざさない誇大理論 (grand theory) の検証を繰り返す風潮を、GTAの開発を通して、データに根ざした理論 (graun-

ded theory) の構築へと向かわせようとしたのが当該研究アプローチのそもそもの始まりであったことに起因する。つまり、先行研究の先延ばしの主張の背景には、既存の理論に縛られた考えを一度白紙に戻し、新たな理論の可能性を徹底的に追求しようとするグレイザーの強い意図があったといえる。しかしながら現在は、先行研究に対し無知な状態で調査を始めることを奨励する者はほとんどおらず、むしろ早い段階で先行研究に精通することで、自身の GTA 研究から得た新たな知見を通して既存の理論を批判的に評価することが推奨されている。

以上が、バージョンの違いを超越した GTA の特徴である。次に、グレイザー・ストラウス版に代表される客観主義的 GTA とシャーマズの構成主義的 GTA の相違点について、シャーマズ (Charmaz, 2000 / 平山監訳 2006, 2009) に依拠しながら、「哲学的前提における違い」と「研究プロセスにおける違い」の両面から概説する。研究プロセスにおける違いについては、具体的に、(1) 分析における焦点、(2) 研究目的、(3) 問いの立て方、(4) コード化の戦略、(5) 最終プロダクトとしての「理論」とその執筆スタイルに着目して議論する。

3.2. 哲学的前提における違い

異なるバージョンの GTA を理解する際、重要になるのがそれぞれの背景にある哲学的視座である。これは、異なる哲学的視座が、それぞれのバージョンがもつ分析の焦点、研究目的、問いの立て方、コード化戦略のあり方、分析の帰着点としての「理論」のあり方を既定するからである。

哲学的視座は、しばしばトーマス・クーン (Kuhn, 1962 / 中山訳 1971) による古典的名著 *The structure of scientific revolutions* (邦訳タイトル『科学革命の構造』) に由来し「パラダイム」と呼ばれる⁷⁾。パラダイムの違いを理解する上で重要となる哲学的概念が存在論 (ontology)、認識論 (epistemology)、そして方

7) パラダイムということばがあまりに多義的であることから、敢えてこのことばを使用せずに「世界観」(worldview) ということばに置き換える研究者もいる。例えば、混合研究法 (mixed methods research) で数々の著作を世に送り出している John Creswell がその一人である。

法論 (methodology) である。ポスト実証主義と構成主義は、存在論 (何が本当に存在するのか、知識とは何か)、認識論 (知る対象を研究者はどのように知るか)、そして方法論 (それをどのように研究するのか) において異なる立場を採る (末田, 2011)。以下の表は、2つのパラダイムが存在論、認識論、方法論においてどのように異なるかを、Mertens (1998) をもとに筆者がまとめたものである。

表 1. ポスト実証主義と構成主義

	ポスト実証主義	構成主義
存在論	調査する側の視点と独立して、一つの「客観的リアリティ」が存在する。そのため研究者の使命は、その客観的リアリティを発見するところにある。	リアリティは社会的に構成される。従って、人にはそれぞれ異なるリアリティが存在する。研究者の使命はリアリティを「発見」するのではなく、社会的に構成された複数のリアリティの「意味解釈」をするものである。
認識論	研究の対象と研究者は完全に独立した存在であるとされる。研究者の理論、仮説、これまでの知識が対象の観察に影響を与えると認められた上で、より「客観的」になろうとする態度を重視する。	研究者と研究対象者は互いに影響し合う関係にある。従って、研究者はより人間相互間の関係 (敬意を持って交渉された、相互に学びあう関係) を重視した中でデータを収集する。
方法論	自然科学の実験法 (「客観性」を重視した厳格なデータ収集と分析) を社会科学にあてはめようとする。人間を対象とする社会科学では、被験者の無作為割付の難しさなどから自然科学的な純粋な実験は不可能であるため、準実験計画法を使って実験を行う。質的研究法もこのパラダイムで使用できないわけではないが、量的研究法が一般的な研究方法である。	調査的面接、観察、文書分析などがこのパラダイムの枠組みにおける典型的な調査方法で、次のような特徴をもつ。(1) 複数のデータ源から情報を時間をかけて収集し、(2) 調査中、尋ねる質問が時間の経過とともに変化することを許容し (プロセス重視)、(3) 調査対象の文脈に関する情報を詳細に報告し (調査対象者と取り巻く環境を包括的に把握)、(4) 調査対象者の視点から、ある事柄を説明・理解することを調査の目的とする。

Mertens (1998, pp. 9-15) をもとに筆者が作成

UCSFで大学院時代を過ごしたシャーマズが、客観主義的 GTA の考案者であるグレイザーとストラウスの二人から当該研究アプローチを学んだのは20世紀中盤である。前述したとおり、社会科学においてポスト実証主義が優勢であったこの頃、社会的リアリティ（社会的現実）の外在性が存在論的前提とされることが一般的であった。これは、誰が探究しても社会的リアリティとして立ち現れるものは同一のものであるという前提であり、そのため研究においては、いかにバイアスなく客観的に社会的リアリティを「発見」するかが重視された。一方で、ポスト実証主義がもつ種々の問題点が明らかになった70年代以降は、これに代わる新たな哲学的視座が求められ、構成主義はその一つであった（Teddlie & Tashakkori, 2009）。構成主義では、外在する一つのリアリティの存在が前提になるのではなく、人によってリアリティは異なる、つまり複数のリアリティが存在するという前提を採る。

認識論的観点においては、客観主義的 GTA が「データは発見されるもの」であると考えのに対し、構成主義的 GTA は「データは相互行為によって構築されるもの」と捉える。これは、客観主義的 GTA が逐語録から文字列を切り分けキーワードを「発見する」というスタンスを採るのに対し、構成主義的 GTA はインタビューにおけるある種の状況が一定のキーワードを研究参加者から「引き出す」と考えるからである。また、概念の生成においては、そこに「解釈の余地はなく」、誰が分析しても同じ概念が取り出されるというスタンスを客観主義的 GTA が採るのに対し、概念は「解釈によって生成される」ため、人によって異なる概念が取り出されるというスタンスを構成主義的 GTA が採るためでもある。つまり、客観主義的 GTA の前提では、誰が分析しても同一のデータからであれば同一の仮説・理論 (the theory) が浮上すると考えるのに対し、構成主義的 GTA では、データと研究者の相互作用の結果、ある一つのバージョンの仮説・理論 (a theory) が構築されると考えるのである。

方法論的には、客観主義的 GTA が超然的な観察者としてのスタンスで現象を研究するのにに対し、構成主義的 GTA では研究対象者の世界に研究者が自身を浸らせる (immersion) ことで現象に近づこうと試みる。したがって、客観主

義的 GTA では客観性、中立性が重視され、研究者は自らを受動的で権威的な観察者として位置づけるのに対し、構成主義的 GTA では、研究者の価値中立性を否定し、価値観、優先順位、立場、行為に影響される観察者としての研究者を前提とする。また、分析対象となるデータについても、実証主義の伝統の中にある客観主義的 GTA が、データそのものを外在的リアリティを映し出した鏡のようなものであると無批判に捉えるのに対し、構成主義的 GTA は、データは何らかの状況において何らかの意図や目的によってつくられた、相対的、状況依存的で不完全なものであるという、批判的なスタンスを採る。

以上のように、グレイザーとストラウスによる客観主義的 GTA は、ポスト実証主義の哲学的前提の特徴を色濃く反映したものであり、シャーマズによる構成主義的 GTA はポストモダンの視点を積極的に採り入れたものといえる。

ブライアントとシャーマズ (Bryant & Charmaz, 2007) は、客観主義的 GTA に対して批判的である一方、一定の評価も与えている。具体的には、まず、客観主義的 GTA が質的研究実践のノウハウを誰もがアクセス可能な形に厳密なガイドラインとしてまとめた点が挙げられる。これにより、質的研究法の分析手続きは明確さに欠けるという量的研究者からの批判の乗り越えが為された。さらに、客観主義的 GTA は、質的研究法が科学的研究アプローチの一つとしてその地位を確立して行く上での政治的貢献を行った点も挙げられる。例えば、実証主義が優勢であった時代において質的研究が研究助成金を獲得することが困難な状況にあっても、研究計画書の中で GTA の使用を記載することで有利になったことが挙げられる⁸⁾。このように、客観主義的 GTA は、20 世紀後半

8) 科学的研究アプローチとしての質的研究の正当性が広く認識されるようになった現在でも、フィールドによってはこのあたりの傾向は変わっていないところがあるかもしれない。実際筆者も某医療系英語学術雑誌に質的研究論文を投稿した際に査読者の一人から GTA の使用の記載を指摘されたことがあった。当該研究において筆者は理論的サンプリングを使用していなかったため GTA の使用という記載は避けたのだが、本研究アプローチの政治力を垣間見るような経験だった。ちなみに当のシャーマズは、GTA の使用を論文中で明示することはそれほど重要であるとは考えていないと思われる。それは、彼女が論文・著書の中で、GTA の使用を明言していない質的研究事例の中に優れたものが多数あることを指摘しているところからもわかる。

を通じて起きた「質的革命」に勢いを与える重要な役割を担ったといえる (Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, p. 12)。

一方でブライアントとシャーマズ (Bryant & Charmaz, 2007) は、客観主義的 GTA のもつ限界も指摘している。客観主義的 GTA がデータの生産に関してナイーブな前提をもつことは先にも述べたが、これは問題のほんの一部に過ぎない。ブライアントとシャーマズは、客観主義的 GTA のもつ重要な問題として次の2点を挙げている。まず一点目は、客観主義的 GTA が研究における帰納的側面を強調しすぎるあまり、帰納法そのものがもつ危うさが当該研究アプローチの限界になっている点である。帰納的推論法には、調査者がすべての事例を観察し尽くすことができないことで例外事例を認識できないという問題がある。さらに、条件に類似性が認められれば、観察される現象にも類似性があると判断してしまう、「斉一性原理」の仮定に関連する問題もある。つまり、類似性の判断には研究者の主観が影響するにもかかわらず、この前提に対して客観主義的 GTA は批判的になりきれていないという限界がある。二点目は、「質的研究は非科学的で、予備調査的で、主観的で、厳密さに欠ける」という量的研究者の批判をかわそうとするあまり、量的研究法と同様の厳密性と再現性を客観主義的 GTA が質的研究法に求めたことである。結果として、客観主義的 GTA は、自らが批判の対象としていたはずの実証主義的な傾向を却って脱しきれないものになってしまったとブライアントとシャーマズは指摘する。このことは、ポスト実証主義が優勢であった時代の思想的制約をグレイザーとストラウス自身も受けていたことを示しているといえよう。科学的研究手法として正当な研究アプローチとは何かを、時代のもつさまざまな制約や思想的潮流が規定するメカニズム (図1) を理解する上で、これは良い具体例といえよう。

以上のような客観主義的 GTA のもつ限界を乗り越えるものとして、シャーマズは構成主義的 GTA を提唱するに至る。そして、その彼女の新たな GTA を根底から支えた哲学的視座が、70年代以降その関心が高まることとなった構成主義であった。シャーマズは、客観主義的 GTA の捉え直しから生まれた自身の構成主義的 GTA を、徹底的な経験的探究において解釈的アプローチを採

用する、「ポストモダニズムと客観主義の中間の立場」(Charmaz, 2000 / 平山監訳 2006, p. 170) を採る研究戦略と位置づけている。構成主義的 GTA は相対主義的立場を採り、研究参加者および研究者双方の多様な視点と多元的リアリティの存在を前提とする。そして、フィールドにおける研究者自身の行為、状況、および研究参加者が、分析の中でどのように解釈されるかについて常に自己内省的 (reflexive) であろうとする。

3.3. 研究プロセスにおける違い

本節では議論の焦点を研究プロセスに移し、客観主義的 GTA と構成主義的 GTA の特徴の違いを概説する。ここでは、(1) 分析における焦点、(2) 研究目的、(3) 問いの立て方、(4) コード化の戦略、(5) 最終プロダクトとしての「理論」とその執筆スタイル、の5つのポイントに着目する。

(1) 分析における焦点の違い

異なる哲学的前提に支えられた客観主義的 GTA と構成主義的 GTA においては、自ずと分析の焦点についても異なるスタンスが採られることとなる。

まず、ポスト実証主義の影響を強く受けた客観主義的 GTA では、調査結果の一般化可能性を志向する。したがって、研究の帰着点は、文脈に依存しない抽象概念の生成ということになる。そして、理論はこれらの概念間のつながりによってできる。一方、相対主義的スタンスを採り、研究結果の文脈依存性を前提とする構成主義的 GTA は、研究の帰着点として現象に関する解釈の構築を目指す。

客観主義的 GTA では、変数分析に焦点が当てられる。そのため、変数の機能を果たすものとして理論的カテゴリーを発展させることが重視される。一方、概念は研究者とデータのやりとりから相互構成的に生成されると考える構成主義的 GTA では、創発的概念の分析に焦点が当てられる。

外在する一つのリアリティを存在論的前提に据える客観主義的 GTA の分析では、コアカテゴリーまたは一つの基本的社会プロセスに焦点が当てられる。

コアカテゴリーとは、理論を生成する上で最も重要となるカテゴリーであり、観察対象となる現象に関するもっとも中心的課題もしくは関心事を指す。基本的社会プロセスは、明確な始まりと終わりのあるプロセスのことであり、GTAによる長期にわたるフィールドワーク調査がその探究には適している。Glaser (1978) は GTA の目的を、仮説検証でも現象の大量の記述でもなく、コアカテゴリーを中心に理論を生成することであると述べている。ただし、基本的社会プロセスはコアカテゴリーの一つのタイプであり、コアカテゴリーが必ずしも基本的社会プロセスであるとはいえないとも主張している。他方、構成主義的 GTA では、リアリティの多元性を存在論的前提とするため、コアカテゴリーや一つの基本的社会プロセスの存在を追求する立場は採らない。むしろ分析の焦点は、カテゴリーやプロセスにおける「多様性」に当てられることになる。

さらに、客観主義的 GTA では、研究参加者が明確に言語化したことに焦点が当てられるのに対し、構成主義的 GTA では、明確に言語化された研究参加者のことば以外にも、暗示的に示された意図や沈黙に注意を払う。そのため、非言語コミュニケーションの手がかりも分析対象となり、研究参加者が発する微妙なサインも見逃さない、エスノグラファーとしての研究者の力量がより試されることとなる。

(2) 研究目的の違い

客観主義的 GTA と構成主義的 GTA の研究目的の違いはどこにあるのだろうか。

まず、客観主義的 GTA では、外的世界の説明と予測を提供することが研究の目的として掲げられ、研究者は窓の外から研究参加者の意味世界を観察するようなスタンスで現象に迫る。具体的には、研究者は調査対象となる現象を説明・予測するための変数を特定する。分析において理論的カテゴリーを発展させる意義は、カテゴリーが変数の機能を果たすところにある。そして、出来事や行為が起きる条件を特定した上で、検証可能な仮説を導出することを目指す。

一方、構成主義的 GTA では、研究参加者の暗黙の語りや行為の意味を探索

し、解釈することが研究の目的として掲げられ、研究者は研究参加者の意味世界に入り込んで内側からこれを観察するスタンスを採る。そして、客観主義的 GTA 同様、出来事や行為が起きる条件を特定するが、それは検証可能な仮説を提示するためではなく、研究参加者の語りを織り込んだ彼（女）らのストーリーを紡ぎだすためである。

(3) 問いの立て方の違い

客観主義的 GTA と構成主義的 GTA が異なる研究目的をもつということは、当然のことながら二つのバージョンの GTA には問いの立て方においても違いがあることを意味する。

客観主義的 GTA においては、「事実」を反映した答えを導くと仮定されている問いが立てられる。このような問いは、ストラウスとコービン (Strauss & Corbin, 1990, 1998) に見られるような、who, what, how, how much, when, why といった疑問詞で問うようなものが中心となる。これらの問いから生成されるカテゴリーは「客観的」で「外在的」な性格を帯びるとシャーマズ (Charmaz, 2000 / 平山監訳 2006) は指摘している。

これとは対照的に、構成主義的 GTA では客観的事実を求める問いではなく、「意味」を探究することを目的とした問いを立てる。「痛み」の例で考えるのであれば、痛みとは「さまざまな形態をとる経験や感情」(Charmaz, 2000 / 平山監訳 2006, p. 190) という極めて主観的なものとなり、誰もが客観的に知り得る外在的なものという客観主義的 GTA のような仮定は採らない。そのため、構成主義的 GTA において生成されるカテゴリーはより「直感的」で「印象的」なものとなる。

表 2 は、シャーマズが「痛みの経験と痛みの軽減という 2 つのカテゴリーに関わる議論の中で出現する問い」(Charmaz, 2000 / 平山監訳 2006, p. 190) の具体例を通して、客観主義的 GTA と構成主義的 GTA のそれぞれの問いの特徴を示したものである。

表 2. 客観主義的 GTA と構成主義的 GTA の間の特徴

客観主義的 GTA	構成主義的 GTA
誰が関節炎を患っている人々の痛みを軽減させるのか	痛みを痛みにしているものは何か
どのように痛みは経験され、対処されているのだろうか	痛みを経験している当事者によって定義される現象にとって、本質的なものは何か
どのくらい痛みは軽減される必要があるのだろうか	痛みを感じる人は、何をもって痛みの特性や特徴を意味づけているのか
いつ痛みが起こり、いつ痛みを軽減させるのか	その人は、自分の痛みをどのように経験しているのか ⁹⁾
なぜ痛みを取り除くことが重要なのか	もし何かできるとすれば、その人は痛みについて何をするのか ¹⁰⁾

以上のように、存在論的・認識論的前提の違いを反映して、二つのバージョンの GTA は問いの立て方にもそれぞれ顕著な特徴があることがわかる。

(4) コード化戦略の違い

それでは、具体的にデータを分析する際に、二つのバージョンの GTA にどのような違いがあるのだろうか。ここで着目すべきが、それぞれのバージョンの GTA がもつコード化戦略の違いである。

シャーマズ (Charmaz, 2000 / 平山監訳 2006) は、客観主義的 GTA におけるコード化戦略の例として、グレイザー版 (Glaser, 1978) における 18 種類の理論的コード化群と、ストラウス・コービン版 (Strauss & Corbin, 1998) における軸足コード化、パラダイム、条件 / 帰結マトリックスといった分析のための諸道具を挙げている。グレイザーの理論的コード化群は、カテゴリー間のあり得る関係を特定するもので、その例として 6 つの C と呼ばれる理論的コード化群がある。これらは、原因 (cause)、文脈 (contexts)、偶発性 (contingencies)、帰

9) このような問いは、ストラウス・コービン版でも用いられる。

10) 同上。

結 (consequences), 共変的要素 (covariances), 条件 (conditions) である。これらの理論的コード化群は、理論的カテゴリーを「変数」の機能を果たすものとして発展させることで、説明力における非文脈性、簡潔性、包摂性を達成するような理論生成を志向するグレイザー版 GTA の特徴を表している (Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, 2014)。一方、ストラウス・コービン版において考案された分析のための諸道具は、カテゴリー間の関係を見るための軸足コード化、明らかにしたい現象の構造とプロセスを見出すために、状況 (条件)、行為・相互行為、帰結といった特定の視点からデータを検討することを促すパラダイム、行為 / 相互行為 (つまりプロセス) に影響を与えるマクロとミクロの条件と、そこから導き出される帰結 (つまり構造) を詳細に見るための条件 / 帰結マトリックスと多岐にわたる。これらは、あらゆる側面からデータを検討するための道具であり、分析を表層的なものに終わらせないための工夫といえる。しかしその一方で、分析において厳密な手続きを強調することはデータと研究者の対話の妨げになってしまうと、これらの諸道具を用いることについてシャーマズは注意を喚起する (Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, 2014)。

客観主義的 GTA のコード化戦略に対し、構成主義的 GTA のそれはかなりシンプルで柔軟なものとなっている。これは、研究者の注意を煩雑なコード化戦略に向かわせる代わりに、研究参加者の経験世界へと没入させるための意図的な戦略である。切片化は、客観主義的 GTA においては研究者がデータから距離を置くために行われるが、構成主義的 GTA では研究参加者の立ち位置に研究者が自らを置くために行われる。結果として、シャーマズの GTA における分析手順は3段階であり、用いられるコード化戦略も極めてシンプルな2種類である。第1段階は「初期段階のコード化」であり、ここでは理論的な方向性に対しオープンな行ごとのコード化を行う。第2段階は「焦点化のためのコード化」であり、ここでは大量のデータを取捨選択する。つまり、行ごとのコードを比較・分類し、焦点化されたもっとも顕著で意義のあるコードを生成する段階である。最終段階の第3段階では焦点化コードが比較・分類され、カテゴリーにまとめられる。その際、研究者はメモ書きを活用してこれを発展させる。

また、カテゴリーの精緻化はアブダクション的推論と理論的サンプリングを用いて試みられる。

(5) 最終プロダクトとしての「理論」とその執筆スタイル

GTA を用いた研究の最終目的は、データに根ざした理論の構築である。しかしながら、客観主義的 GTA と構成主義的 GTA では、理論とはどうあるべきかに対する考え方にも、それを報告する上でどのような執筆スタイルが適切であるかという考え方にも、哲学的前提に起因する顕著な差異がある。

客観主義的 GTA の理論は、研究対象の現象における変数分析、唯一の基本的プロセスやコアカテゴリーを見出すことを目的に構築された因果説明の記述である。つまり、出来事や行為が起こる原因、条件、帰結、予測、あるいは主要な問題の解決に関する客観的な記述が理論ということになる。その執筆スタイルは、極めて客観的・科学的で淡々としたものである。シャーマズは、このような客観主義的 GTA の理論・執筆スタイルのあり方が、「発見されることを待っている外的な現実と、それに関する事実を記録する先入観のない観察者を前提」(Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, p. 141) としたものであると主張する。そして、このような「没価値的中立性を主張することは、皮肉なことにひとつの価値的な立場を前提としている」(抱井・末田監訳, p. 142) と批判する。

一方、構成主義的 GTA では、理論は「世界の解釈的描写」と捉えられ、執筆スタイルも客観的な事実の淡々とした記述という客観主義的 GTA のそれとは対照的に極めて文学的である。つまり、読み手の感情を揺さぶるような、「当該研究への読者の想像的参加を促すような」(Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, p. 157) 執筆スタイルである。これは、客観的で唯一の現実などは存在しないとする構成主義の前提に則っているからこそ合理的な執筆スタイルといえる。構成主義の前提に従えば、理論は研究者の見方に依存するもので、仮にもし異なる研究者が類似したアイデアを思いつくことがあるとしても、それを理論的に表現する上で違いが生じ得る。つまり、研究者は自身が構築する理論の

一部であり、本人にその自覚があろうがなかろうが、理論はそれを構築する研究者のさまざまな経験に内在する立ち位置を反映するものであるというのがシャーマズの主張である (Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, 2014)。GTA が本来依拠するプラグマティズム哲学に回帰するのであれば、GTA によって生み出される執筆作品は、「研究する世界に関して、出来事や陳述の表面的な報告をするよりむしろ、解釈的な表現 (interpretive rendering) を構成することを促進してくれる」(Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, p. 197) のものであるというシャーマズの論理的帰結が、構成主義的なグラウンデッド・セオリーというオルタナティブであったといえる。

4. 構成主義的 GTA とは

4.1. 「グラウンデッド・ストーリー」を紡ぎだすためのアプローチ

以上では、構成主義的 GTA を理解することを目的に、客観主義的 GTA との対比を通してそれぞれの特徴を概観した。二つのバージョンの GTA には、それぞれがもつ哲学的前提の違いに依拠する分析の焦点、研究目的、問いの立て方、コード化の戦略、最終プロダクトとしての「理論」とその執筆スタイルに異なる特徴があることがおわかりいただけただろう。なお、質的研究から導出された結果を評価する上でさまざまな規準が存在するが、客観主義的 GTA も構成主義的 GTA もその多くを共有する点を付け加えておきたい。例えばシャーマズ (Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, 2014) は、グレイザーによる適合性 (fitness)、有効性 (workability)、有意性 (relevance)、そして修正可能性 (modifiability) の重要性を認めた上で、構成主義的 GTA を評価する上での重要な規準として、信用性 (credibility)、独創性 (originality)、共鳴性 (resonance)、そして有用性 (usefulness) を挙げている。つまり、グラウンデッド・セオリーが単なる実務の問題解決報告ではなく学問的であること、証拠基盤をもつものであること、そして感性に訴えるものであることを構成主義的 GTA の評価規準としてシャーマズは強調している。

シャーマズは、二つのバージョンの GTA における研究者のイメージを、

「白衣を着て科学実験を行う実験者」(客観主義的 GTA)と「豊かなイマジネーションで現象のありようを表現する作家」(構成主義的 GTA)として対照的に捉えている(Charmaz, 2000 / 平山監訳, 2006, p. 191)。「作家」としての研究者は科学実験を行うような従来の研究者とどのような点で異なるのだろうか。それは、従来の研究者があたかも自身を完全に中立的な立場にあるかのように「客観性のマント」を身にまとってきたのに対し、作家としての研究者はこの中立性の幻想を捨て去った上で、研究活動は元来「イデオロギイ的活動」であるという前提をもっている点である(Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, p. 173)。一方で、構成主義的 GTA を用いる研究者たちが自身のバイアスに無自覚・無批判になることは大変危険なことである。構成主義的グラウンデッド・セオリストは、研究プロセスやその成果に対して常に内省的である必要がある(Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, 2014)。構成主義的 GTA では、客観性・中立性という枷が取り払われてしまったからこそ、より一層この点が重要になる。

レトリック、比喩、ことばの対比を駆使した豊かな表現力によって、シャーマズによる GTA 論文はともすると文学作品を読んでいるのではないかと錯覚するほどである。構成も従来の質的研究論文のそれとは異なり、「論文」というよりはまさに「作品」を読んでいるような感覚になる。シャーマズの表現力によって、いまだかつて会ったことも話しをしたこともない人々の生きられた経験が、あたかも直接的に経験したものかのように鮮明に我々読み手に伝わってくる。そして、それらの経験が時に我々自身や身近な人々の経験とも重なり、心を揺さぶられるような、熱いものが胸の奥から込み上げてくるような感覚さえをも覚える。研究参加者の世界への入り口が、認知レベルだけでなく感情レベルにおいても開くため、現象へのより深い理解が可能になって行くのを感じる。

実のところ、「セオリー」を「ストーリー」として表現する構成主義的 GTA とは、グラウンデッド・ストーリー・アプローチ (Grounded Story Approach: GSA) とも呼べるものなのかもしれない。従来の GTA は、研究対象のダイナ

ミズムやリアリティを捨象し、シンプルで簡潔な (parsimony) 変数間の関係が明確になるように最終成果物としての「セオリー」を創り上げていく。一方、GSA とも呼べるシャーマズのアプローチは、研究対象となる状況のダイナミズムやリアリティを重視し、その状況がありありと読者の前に立ち現れるように最終成果物としての「ストーリー」を描き出す。その文学的な執筆スタイルも手伝って、最終成果物は臨場感のある、読者の心を揺り動かすものとなる。構成主義的 GTA は、いわば複数の異なる糸であるストーリーを捩り束ねることで、一本一本の糸のもつ具体性を超越した大きな太い縄、つまりコア・ストーリー (Charmaz, 2000 / 平山監訳 2006) へと昇華させる手法であると言えるのではないだろうか。

4.2. 構成主義的 GTA を身近な手法にするために

ここからはやや現実的な話をしたい。構成主義的 GTA がどのようなものであるかを理解し、その目指すところに共鳴したところで、この手法を実際に用いて研究を行い論文として出版することはそれほど容易なことではないかもしれない。その要因はいくつか考えられる。まずひとつは研究者個人のもつ表現力や感性の鋭さに関するもの、もうひとつは文学作品のようなスタイルで執筆された最終成果物の投稿先に関するものである。誰もが優れた詩人になれるわけではないように、研究者の存在論的・認識論的立場といった哲学的問い以前に、研究者のもつ表現力や感性の鋭さのようなものが、ある程度この手法を使いこなせるか否かを決定してしまうようなところが現実問題としてあるように思われる。また、このようなアプローチが時に受け入れられず周縁に追いやられる傾向がまだまだあることは、シャーマズ自身も認めている (Charmaz, 2008)¹¹⁾。豊かな表現力によって「作品」を完成させたところで投稿先が見つからない、もしくは投稿しても受理されないということで、作品を読んでもら

11) 同時にシャーマズ (Charmaz, 2008) は、自身の専門領域においてこのようなアプローチが認められないのであれば、そこから離脱する勇気をもつことも大切であり、それによって自身を解放することができるだろうと訴えている。

えないというのでは本末転倒だろう。したがって、なるべく多くの人が構成主義的 GTA を用いた研究を実施し、出版するためには、それぞれの研究者が構成主義的 GTA のエッセンスを保持した上で、この手法を柔軟に変更していくことが求められると考える。

「構成主義的 GTA」をキーワードに筆者が最近行った英語論文の先行研究調査によると、多くの論文がシャーマズの構成主義的 GTA のエッセンスを抜き出し、ほぼ従来型の構成に沿って研究論文を執筆していることがわかった。文体も決して文学作品のようなものではない。しかし、これらの論文は構成主義的 GTA のエッセンスとして、(1) 研究の目的は「意味を明らかにする」・「理解を深める」こと、(2) 調査者と調査参加者の間に密接な関係¹²⁾が求められること、(3) 客観的的真実ではなく経験の意味を反映したカテゴリーを生成すること、(4) 経験の本質である「コア・ストーリー」を描くこと、といった点を掲げている。構成主義的 GTA の特徴を表すこれらのキーエッセンスにシンプルなコード化戦略を統合することによって、看護や教育といった実践研究の分野から構成主義的 GTA の論文として出版されているものが年々増えてきている(例えば、Barnett, 2012; Gardner, McCutcheon, & Fedoruk, 2012; Jones, & Hill, 2003; Long-Suthehall, Wills, Palmer, Ugboma, Addington-Hall, & Coombs, 2011; Thornberg, & Elvstrand, 2011)。これらのキーエッセンスを手がかりに、構成主義的 GTA を用いた研究の実施および出版がより身近で容易なものとなり得るだろう。

5. むすび

構成主義的 GTA は多元的リアリティの前提をもち、問題解決に強い関心を示す。そして、調査における価値中立性に疑義を抱くプラグマティズムと、研

12) 看護師と患者、カウンセラーとクライアントといったように、調査者と調査協力者という関係以前に密接な関係にある場合がその例である。データは調査者と調査協力者の相互作用から生み出されるもので、決して唯一の現実を映した鏡ではないという構成主義的 GTA の前提は、既に密な関係にある人を調査対象とする研究を実施する上で親和性があるといえる。

究参加者の意味の世界に深く入り込んでいくことに価値を見出すシンボリック相互作用論に思想的基盤を求める (Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, 2014)。古典的 GTA は客観主義的アプローチを取ることによってプラグマティズムやシンボリック相互作用論の特徴を生かしきれていなかったが、構成主義的立場を取ることでシャーマズは GTA にこの 2 つのシカゴ学派の伝統を呼び戻した。

「知識」というものは、客観主義的 GTA を用いる研究者が主張するような価値中立的なものではない。知識は常に政治的なものであることを、構成主義的 GTA は改めて我々に認識させる。また、具体的な分析技法や手続きのみに無批判に固執するのではなく、何より自身の哲学的前提の位置づけを明らかにした上で、研究実践をいかに行うべきかを己に問うことの重要性がみえてくる。GTA の発展の系譜は、「知識探求の営みに対する絶え間ない問いかけ」の大切さを私たちに語っているといえる (抱井, 2008)。

デンジン (Denzin & Giardina, 2009) をはじめとする多くの質的研究者たちは、質的研究を行う目的は社会問題の解決であり、社会の変革であると主張する。シャーマズ (Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, 2014) もまた、構成主義的 GTA を用いる研究者は、グラウンデッド・セオリーの構築を通してよりよい世界を創造するために貢献することが可能であり、そうするべきであるという呼びかけをしている。「知識をつくり変えるツールとしての構成主義的 GTA」が、今後より多くの研究において用いられることで我々の社会がより良いものとなることを願い、本稿を閉じることとする。

引用文献

- Barnett, D. (2012). Constructing new theory for identifying students with emotional disturbance: A constructivist approach to grounded theory. *The Grounded Theory Review*, 11 (1), 47-58.
- Bryant, A., & Charmaz, K. (2007). Introduction - Grounded Theory Research: Methods and Practices. In A. Bryant & K. Charmaz (Eds.), *The Sage handbook of grounded theory* (pp. 1-28). London, Sage.
- Charmaz, K. (2000). Grounded theory: Objectivist and constructivist methods. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of qualitative research*. (2nd ed.,

- pp. 509–535). Thousand Oaks, CA: Sage. (シャーマズ, K. (2006). 「グラウンデッド・セオリー: 客観主義的方法と構成主義的方法」(山内祐平・河西由美子, 訳), 『質的研究ハンドブック』第2巻, (平山満義, 監訳). 京都: 北大路書房.)
- Charmaz, K. (2006). *Constructing grounded theory: A practical guide through qualitative analysis*. London: Sage. (抱井尚子・末田清子, 監訳 (2008). 『グラウンデッド・セオリーの構築: 社会構成主義からの挑戦』. 京都: ナカニシヤ出版.)
- Charmaz, K. (2008). Voices from the margins: Voices, silences, and suffering. *Qualitative Research in Psychology*, 5 (1), 7–18.
- Charmaz, K. (2009). *The emergence of constructivist grounded theory*. Lecture conducted at Aoyama Gakuin University, Tokyo, Japan. (March 14, 2009)
- Charmaz, K. (2012). The Power and Potential of Grounded Theory. *Journal of the BSA MedSoc Group*, 6 (3), 2–15.
- Charmaz, K. (2014). *Constructing grounded theory: A practical guide through qualitative analysis* (2nd ed.). London: Sage.
- Clarke, A. (2003). Situational analysis: Grounded theory mapping after the postmodern turn. *Symbolic Interaction*, 26 (4), 553–576.
- Clarke, A. (2005). *Situational analyses: Grounded theory after the postmodern turn*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Corbin, J., & Strauss, A. (2007). *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory* (3rd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage. (操華子・森岡崇訳 (2012). 『質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 (第3版)』. 東京: 医学書院.)
- Denzin, N. K., & Giardina, M. D. (2009). *Qualitative inquiry and social justice: Toward a politics of hope*. Walnut Creek, CA: Left Coast Press.
- Gardner, A., McCutcheon, H., & Fedoruk, M. (2012). Discovering constructivist grounded theory's fit and relevance to researching contemporary mental health nursing practice. *Australian Journal of Advanced Nursing*, 30 (2), 66–74.
- Glaser, B. G. (1978). *Theoretical sensitivity*. Mill Valley, CA: The Sociology Press.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1965). *Awareness of dying*. Chicago: Aldine. (木下康仁訳 (1988). 『「死のアウェアネス理論」と看護: 死の認識と終末期ケア』. 東京: 医学書院.)
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory*. Chicago: Aldine. (後藤隆・水野節夫・大出春江訳 (1996). 『データ対話型理論の発見: 調査からいかに理論をうみだすか』. 東京: 新曜社.)
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1968). *Time for dying*. Chicago: Aldine.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1971). *Status passage*. Chicago: Aldine.
- Hallberg, L. R.-M. (2006). The “core category” of grounded theory: Making constant. *International Journal of Qualitative Studies on Health and Well-being*, 1, 141–148
- Jones, S. R., & Hill, K. E. (2003). Understanding patterns of commitment: Student motivation for community service involvement. *Journal of Higher Education*, 74 (5), 516–539.
- 抱井尚子 (2008). 知識探究の営みに対する絶え間ない問いかけ (書評). 質的心理学研究, 7, 247–248.

- 抱井尚子 (2010). 「社会構成主義版グラウンデッド・セオリー」研究法ワークショップ (概要編). 第9回多文化関係学会プレカンファレンス・ワークショップ (2010年10月15日).
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチへの実践——質的研究への誘い——. 東京: 弘文堂.
- 木下康仁 (2007). 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法. 富山大学看護学会誌 6 (2), 1-10.
- Kuhn, T. (1962). *The structure of scientific revolutions*. Chicago, IL: The University of Chicago Press. (中山茂訳 (1971). 『科学革命の構造』. 東京: みすず書房.)
- Long-Suthehall, T., Wills, H., Palmer, R. Ugboma, D. Addington-Hall, J., & Coombs, M. (2011). Negotiated dying: A grounded theory of how nurses shape withdrawal of treatment in hospital critical care units. *International Journal of Nursing Studies*, 48, 1466-1474.
- Mertens, D. M. (1998). *Research Methods in Education and Psychology*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Mills, J., Bonner, A., & Francis, K. (2006). The development of constructivist grounded theory. *International Journal of Qualitative Methods*, 5 (1), 23-35.
- Morse, J. M. (2009). Tussles, tensions, and resolutions. In J. M. Morse, P. N. Stern, J. Corbin, B. Bowers, K. Charmaz, & A. E. Clarke (Eds.), *Developing grounded theory: The second generation* (pp. 13-19). Walnut Creek, CA: Leftcoast Press.
- 戈木クレイグヒル滋子. 編著 (2013). 質的研究法ゼミナール: グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ (第2版). 東京: 医学書院.
- 戈木クレイグヒル滋子 (2014). グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いたデータ収集. 東京: 新曜社.
- Schatzman, L. (1991). Dimensional analysis: Notes on an alternative to the grounding of theory in qualitative research. In D. Maines (Ed.), *Social organization and social process: Essays in honor of Anselm Strauss* (pp. 303-332). New York: Aldine De Gruyter.
- Stern, P. N. (1995). Eroding grounded theory. In J. M. Morse (Ed.), *Critical issues in qualitative research methods* (pp. 212-223). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Strauss, A. L., & Corbin, J. (1990). *Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques*. Newbury Park, CA: Sage.
- Strauss, A. L., & Corbin, J. (1998). *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory* (2nd ed.). Thousand Oaks: Sage. (操華子, 森岡崇訳 (2004). 『質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 (第2版)』. 東京: 医学書院.)
- 末田清子 (2011). コミュニケーション研究のアプローチ. 末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子 (編著). 『コミュニケーション研究法』 (pp. 9-17). 京都: ナカニシヤ出版.
- 田崎勝也 (2011). 量的研究の概要. 末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子 (編著). 『コミュニケーション研究法』 (pp. 55-65). 京都: ナカニシヤ出版.
- Teddlie, C. & Tashakkori, A. (2009). *Foundations of mixed methods research: Integrating quantitative and qualitative approaches in the social and behavioral sciences*. Thousand

理論からストーリーへ

Oaks, CA: Sage.

Thornberg, R., & Elvstrand, H. (2011). Children's experiences of democracy, participation, and trust in school. *International Journal of Educational Research*, 53, 44–54.